

3 へ自分ならではの起ち方

- i 住む世界を変える
- ii 天が計らう
- iii 見聞をかさねる
- iv 自答自答する
- v 段取る

海に詩が溶け込んでいます
土に詩が埋もれています
空に詩が満ちています
ヒトにも詩がひそんでいます
見つけるのは難しい
どの詩もまだうまれていませんから

—
谷川俊太郎

3. <自分ならではの>の起ち方

住む世界をかえる

「起業なんて簡単さ、電話をFAXとパソコンさえあれば家でだって始められる。問題はここだ！」

そういつて右手の人差し指を自分のこめかみにあてた先生。日本で活動するニュー・ジブランド出身のジャーナリスト。ビジネス英語の初授業で受講者の入学動機を聞き終えた彼が、なんとも不思議そうに、「どうして就職することばかり考えるんだ、どうして自分でマネジメントすることを考えない？」。これに受講生がブーイング、そんな簡単じゃないと。そこで出たきた言葉とポーズ。問題は頭、アイデアだと。それでも反発していました。

まさかその当人が今こうしているとは思っても寄らないでしょう。会社を辞め、一年の遊学をきめこみ入学した学校。外資への再就職を目的とした社会人向けのコース。外資へ再就職の目的とした社会人向けのコース。受講生は休職の口実のようになく、他の受講生の言葉に一番反発していたのは、わたしの先生。後々に同窓生たちが言うほど、自分でも独立するなんて微塵も頭になかっただけでも一番反発したという。こういふことは、どこから自分の中に潜んでいる。「こういふことは、どこから自分の中に潜んでいる」。

会社が湧いたから理由は、安定した状況に疑問が湧いたから。これは性質とし、こいではダメだと感じるようになる。根が傲慢なのか、安定からは潜在的な能力が引き出されないか、暗黙のうちにわかっていたのか、ある段階で自分を問うようになる、やっかいなことに。その気になってしまっは、もう辞めるしかない、次が決まっていなくても。一九八九年一月のことです。昭和が平成にかわった、その月。

退職を決め、自分にとってのリフレッシュ休暇と位置づけたこの一年。ふりかえれば、この間が人生の大きな「間」、大転換点となった。入学した学校での新しい人との出会い、平日のビジネスアワーの街にみる見慣れない光景、夏休みに短期語学留学で訪れたイギリスでの経験、その間に小旅行したフランスでの出来事。どこへ行くかと変わらない自分、そして変わる認識。

これまで属する世界をぬけて、別な世界に入ってみよう。未知だけど嫌な気はしない。世界。学ぶ場なのか、働く場なのか、はたまた遊ぶ場なのか。それそれぞれの事情に合わせてあるいは、向こうからやってくる機会を受けて。これまでも億劫になるのに、そうならないのが「間」、転換点。軌轢や葛藤も少なくないでしょうが、それもうまくやりすごせて、未来の糧を得るはずですよ。

天が計らう

動き、住む世界をかえた時から、自分の世界がすゝ住む世界をかえて。自分が動かしたわけのみると、そういう気になったこと自体が不思議なぐらい。ほんの半年前でさえ、思いも寄らなかつた決断をしてゐるま自分。不安もなくはないけど、それは表向きで、心の奥では意外に平気。

心境の變化。なぜか心の環境が變る。それを紐解こうとすると、分析する対象と項目があまりにも多すぎて、知的にも時間的にも無理。こういう時、天の思し召し、と考えるのが人間の習わし、天の恵。1・に書いた、「時機・タイミング」とはこういうことです。心が動き、体も動いているのは自分自身。あくまで主体は自分なのです。が、天がそう計ってくれていると思うと勇氣と希望がわいてきませんか。

「神託をはじめとするあらゆる種類の占いは、社会的に重要な役割を果たしているようである。個人々の予測をひとつの集団用出口へと導いてやることによって、予測が実現するチャンスを高めているのだ」

フランドス生まれの数学者イーヴアル・エ
クランド「偶然とは何か 北歐神話で読む
現代数学理論全6章」(創元社)の一節で
す。学者の中で一番おもしろいのは数学者

だ、他の学者が言っていました。占いも自分たちが一つのツールとあっさり言うあたりが、そうかもしれません。

心境がかわり、住む世界をかえ、新境地を開く。新しい自分の世界に出会うと、新しい人との出会いが待っています。その人との出会いが、自分ならでは、の世界を創るきっかけになる。ひょっとすると、その人との出会いを感じして、心境がかわり、これまでにない決断をしたのではないか。後々にそう思い返すことだってある。

「自分の生涯をふりかえってみると、どこまでもちたいてくのに、まるで綱渡りのように偶然の出会いを重ねてきたやうな気がするものだし、あそこまで思いきってあれなかつたら、あのときあのときの本を読まなかつたら、自分の人生がまったく変わったものになつたら、自分でうと思ふのであ

「偶然性と運命」(采田元岩波新著)の
あとがきの一節です。なぜこのテーマなの
かを語っている部分。世界的に有名は大哲
学者もこのテーマについて考えているけ
ど、著者いわく、彼らも自分と同様、もて
あましているフシがあると。そこで他者の
言を借りてこのテーマを結んでいます。

「邂逅！ それのみが眞実を開示する。人間の新生も、死よりの復活も、偉大なる邂逅として以外には絶対に把握されない」

百貨店にはこういう機能のあるのだと
思ったものです。会社の中で仕事している

「住む世界」を変えて一年、まずは再就職をしたことがまた、次の展開をつくることになった。入社して五ヶ月がすぎた頃から、結局勤める限りは日本企業も外資もかわらない：という思い。そのタイミングで目の当たりにしたバスからの光景。

見聞きした先に至る人生の選択と決断。

人生の転換点です、独立して仕事するといふ決断は。ただしそれほど深刻さはないもの。そういう気持ちに自分になったのですから、不安や迷いは起こらない。前向きに悩んだとしても、後ろ向きになるようなことははない。もしそうなら止めたほうがいい。まだその時機ではありません。

こういう時、自分の決断を人に打ち明けるとしても、相談することは控えましょ。おそらく人生の決断自体を誰かに相談することははないと思いますが。打ち明けるなら相手を選ぶ必要もあります。

ちやうど決断をした時期に会った知人から諭されました。相談していますが、呆れられました。

もし自分が誰から同じようなことを打ち明けたなら、けっしてはこうは言うまい。人生の大きな決断をするからには、そう簡単に立ち入ることはできない。心配なら心配なりに、決断を尊重しつつ、何か今後のためになるようなことを言おう。

て、今となつては、その知人も見守つてくれ
 らつた。いつかは、「偉いなあ」と言つても
 られたのは、続けてきた結果ですが、続けてこ
 自分のやるべきこと考え、自分の信じていること、
 い求めてゐるから。人のものに乗じていた
 なら、とうにやめていたはずで、小さな
 ハードルも越えられなくて。

△自分ならでは、Vの仕事、それは何か。決断した時からずっと頭の中を占めます。入社してまでもない会社を八ヶ月で辞めることになるのですが、退職願を出す前から、通勤の行き帰りにはずっと自問自答。退職した一九九一年一月以降も頭をめぐらせ、のべ三ヶ月ほど経ったある日。

あ
あつ、
それだ！

外に出る瞬間、頭の中のまじりとして、パッと浮かんだ。ネーミングはもっと後です。

机の前ではなくて、別な何かをしながら
徹底して考える。必ず閃きあり。

段取る

独立して何をするか。自問自答中に気づくことは、もっと勉強しておけばよかった。という。おカネが限られるとなると、一番の資源になるのは「頭」。ニュージランドのジャーナリストが言ったとおり、自分の知、アイディアです。

おカネをかけず、自分の才覚でやれる仕事：。頭のなかでは、過去の自分の仕事ぶり、経験、人から言われたこと、評価などが駆け巡ります。どこに自分ならではの、あるか、仕事のカタチにどうできるか、など。SWOT分析のことはまだ知らなくとも、同じようなことをしていたわけですから、頭の中で、それに三ヶ月要した。

そうして至ったのがパーソナル・アシスタント。このネットミングは、頭の中で仕事のカタチが閃いてからさらに一ヶ月後のこと。自分で自分にとってからしっくりくる言葉を探す。安易に妥協してはいけません。自分ならではのVを表す大事な要素です。

一般的には知られていない業称。当時説明するにピンときたのは、デザイナー。人だけにでもピンときたのは、仕事は「パーソナル・アシスタント」なぜか。それは「パーソナル・アシスタント」はわかっていた元勤務先だったか。

「ト」は。たぶん、「パーソナル・アシスタント」は。たぶん、いいわけです、先方にとつては。どんな役回りをしていくのか想定できて、ちょうどだれかいないかと探していたところ、独立したというから、依頼した、ということ。

サービスの質が想定できて、人柄もわかってる。普通の根拠が必要。資格しか、それらを測るための書き物しかり。資格は未来を保証するものではなく、過去の努力に對する一定の評価。この努力の結果について社会が期待して、機会を与える。

何らかの専門性、それを表す根拠。それを獲得するための努力、学習。さらに、専門性は同じでも、自分ならではのものを磨いていくための多様な学習。それらの段取りが一番大事。

「中小企業診断士をとったんだったら、紹介しがいがある」

個人的には資格に意味を感じた。個人でも診断士取得を聞きつけた元勤務先の上司が得意先の中小企業の後継者育成を頼んできた。その際にもらした言葉で、少し目が開いた。他の多くの人は意味を感じていないけど、他は多くの人は意味を感じていない。

とはいえ資格は未来を保証しません。学習の蓄積、刷新こそ、資格の後光。